原子力規制委員会記者会見録

- 日時：平成29年７月26日（水）14：30～
- 場所：原子力規制委員会庁舎　記者会見室
- 対応：田中委員長

＜質疑応答＞

○司会　それでは、定刻になりましたので、ただいまから原子力規制委員会の定例会見を始めます。

皆様からの質問をお受けします。いつものとおり、所属とお名前をおっしゃってから質問の方をお願いします。

それでは、質問のある方は手を挙げてください。ヨシノさん。

○記者　テレビ朝日、ヨシノです。よろしくお願いします。

東京電力が福島第一原発の３号機のロボット調査を終え、デブリというものが見つかったというようなことを発表しているのは、報道等で御存じだと思いますが、これを受けての御所見をお願いいたします。

○田中委員長　特にありません。デブリがあるのは、大体もう想像していますから。

○記者　この調査が終わって早々の大臣会見では、９月にもデブリの取り出し方針を決めて発表するというような発言もありました。これについては、どのようにお考えでしょうか。

○田中委員長　コメントしません。

○記者　分かりました。ありがとうございました。

○司会　ほかにございますでしょうか。スミさん。

○記者　共同通信のスミです。よろしくお願いします。

今のデブリの件に関連してなのですけれども、先日、東電の会長、社長が田中委員長にぼろかすに怒られて、その直後に急にデブリが見つかりましたとか、随分何か意図的なものを感じなくもないのですけれども、田中委員長はそのあたりをどう感じていらっしゃるでしょうか。

○田中委員長　私はそんなふうには感じていなくて、申し上げたのは、やはりどうしても住民の方に、福島の皆さんに納得していただかなければいけないイシューがいっぱいあるわけですよね。今日も廃棄物の議論をやっていましたけれども、そういったことについて、やはりきちんと誠意を持って話をすべきであって、結果がどうなるかということよりも、まずそのことが大事なのです。パフォーマンスをやっていって、何か済むということではないことは確かですよ。だから、私は今の御質問のような感じは全く持っていませんけれども、別の意味で呆れています。

○記者　済みません。追加で、別の意味でというのをもう少し直接的に教えていただいていいでしょうか。

○田中委員長　この前申し上げたのは、やはりメディアの皆さんにトリチウム水を捨てますとか、私と同じ考えですと言うことは、一人前の大人のやるべきしわざではないですよね。私より年上で立派な方だとしたら、もう少し社会勉強をしてからやらないと大変なことになるということをお分かりいただいたのではないかと思いますけれども。私はそのことを怒っているのです。

○記者　地元の方たちに伝える前に、メディアのインタビューでそういうことをしゃべったということについてですよね。

○田中委員長　そこはあなたも常識的に考えたらいいと思いますけれども、一番そのことで被害を受けたり、困ったりするのは漁業者でしょう。そうしたら、その人たちにまず誠意を持って話をするというのは、これはもう社会的ルールですよ、普通。それを申し上げているのです。

○司会　ほかにございますでしょうか。

○記者　もう一点、明日から同じ東京電力の柏崎刈羽の方に視察というか、訪問されて、現場の方からいろいろなお話を聞かれると思うのですけれども、ネタばらしになってはいけないかもしれないのですが、特に田中委員長としては、どういうところを、あるいはどういう話を聞いて、どういうところに期待しているのか、どういうところを採点すると言うと変かもしれませんけれども、そのあたりを教えてください。

○田中委員長　行ってみていろいろな話をしたいと思いますけれども、これはあくまでも審査会合という法的に決められたものとはちょっと違いますので、その意味では、もっといろいろなお話をしたいとは思っていますけれども、市長との話は公開ですから、その場で取材してください。

○司会　ほかにございますでしょうか。ミウラさん。

○記者　読売新聞のミウラです。

　ちょっとしつこいようですが、1Fの３号機ロボット調査の件で、経済産業大臣を含め、あと、もちろん東京電力も、今回、初めてデブリらしきものが撮影できたというのは大きな前進だというふうに評価しているわけですが、これについてはどのように感じていらっしゃいますでしょうか。

○田中委員長　私は何も感じていません。済みません。

○記者　あともう一点ですが、撮影した結果、格納容器の底部の方にはがれきとデブリと見られる堆積物が一緒くたになっているような状況で、改めて炉内の損傷、おそらくデブリ取り出しは厳しいということがますます明らかになってきたと思うのですが、これについて、今後の廃炉に向けた作業について、ちょっと御所感を頂ければ。

○田中委員長　難しいという感じはしますけれども、所感を今語れと言われても、それが

所感を語れるほどの状況ではないということは感じていますけれども。

○司会　ほかにございますでしょうか。シゲタさん。
○記者　NHK、シゲタです。
　柏崎刈羽の話に戻らせていただきます。明日、明後日と委員長自ら行かれますけれども、先ほど共同通信さんの質問でもありましたが、どういったところにポイントを置いて聞いてみたいなというのがありましたら、お伺いできますか。
○田中委員長　私どもの立場ですから、安全上の観点からいろいろな現場の考え方、実力、そういったものは確認したいと思います。
○記者　特に今回は東京電力という点もあって現地に行かれると思うのですけれども、他電力との比較というのは委員長自らできるものでしょうか。東電の所員の方というのは、明日聞くとしても、他電力と比較してどうなのだろうというのは、どのようにお考えでしょうか。
○田中委員長　この問題は、ほかと比較していいとか悪いとかという問題ではないのです、私の認識としては。私どもが絶対的に確信できるかどうかという、そこが大きなポイントだと思います。
○記者　もう一点なのですけれども、今、確信できるか、納得という言葉が正しいか分からないのですけれども、そういう確信や納得というのができなかった場合というのは、今後の展開はどういうことが考えられるのでしょうか。
○田中委員長　納得できなければ、それは当然、皆さんが想像しているようなことになるのではないのでしょうか。私どもが納得できないのにということになるのではないのでしょうかね。
○記者　それは審査書案をまとめられない、許可が出せないということでしょうか。
○田中委員長　先ほども申し上げましたけれども、これは法的に決められた審査の一つではないけれども、前にも申し上げましたけれども、東京電力はほかの電力とはちょっと違うという、私としてはそれなりの確信が得られなければ、なかなか判断できませんということを申し上げてきているので、その一つですね。

○司会　ほかにございますでしょうか。ナギラさん。
○記者　毎日新聞のナギラです。
　福島第一原発の凍土遮水壁に関して伺いたいのですが、東電が全面凍結の申請を出していまして、検討会で更田委員も認める方向でお話をされていましたが、委員長として、凍土壁が1Fの汚染水のリスクをどの程度下げたと思っていらっしゃるのか、現在の見方といいますか、お考えをお願いします。
○田中委員長　私が思っているというよりも、更田委員会で、水が最近少し減っているという報告を受けて、それはサブドレンの効果ではないのと言っていましたね。凍土壁の

効果について、今、評価できるような状況ではないと私は思っていますけれどもね。

○記者　それから、以前、東電の廃炉に向けた主体性のお話をされているときに、例として、ロボット調査ですとか、あと、凍土壁ということを例に挙げられていましたが、凍土壁の建設ということで東電の主体性のなさを感じるというのは、どういう点で凍土壁で主体性のなさを感じられたのか、少し詳しく教えていただけないでしょうか。

○田中委員長　凍土壁という考え方が出てきたのが、東電オリジナルではないですね。本当に凍土壁で1Fの汚染水が全て片づくという確信を持っているのだったら、それはそれで結構だと思いますけれども、どこまでそこのところをきちっと自分たちなりに、長期的に1Fの廃炉を考えて、考え抜いた末にそれを始めたのかというところは、私はとても東電の主体性というのを感じられないから申し上げました。

○司会　ほかにございますでしょうか。ナガノさん。

○記者　新潟日報のナガノです。

柏崎刈羽について重ねて聞くようで恐縮なのですけれども、明日、あさってと柏崎に行かれて、あと、もう一つ、東電に対して宿題があって、その返答があると思うのですけれども、それも含めて、今後の展開というのはどうなるか教えてください。

○田中委員長　分かりません。

○記者　審査の技術的な方はもう終わっているわけで。

○田中委員長　ある程度、そちらはめどがついたとは理解していますけれども、繰り返しになりますけれども、先日、会長、社長に来ていただいた宿題もまだ受け取っていませんし、まだ分かりません。我々としては、やるべきことはきちっとやっていこうという、今はそんな段階ですね。

○記者　仮に明日、あさって、現場に行って、現場まで安全意識が徹底していないみたいな状況になったときに、また改めて現場を見るということもあるのでしょうか。それとも今回だけで判断するということなのでしょうか。

○田中委員長　それは分かりませんけれども、私の任期を考えれば、私自身が見るということは、多分、今回が最後になると思います。

○記者　ありがとうございました。

○司会　ほかにございますでしょうか。今、手が挙がっているのはお２人ですね。お２人でよろしいですかね。それでは、クラサワさんから。

○記者　APメディアのクラサワといいます。

先日もちょっとお伺いしたのですが、TMIの例を見ても、今のF1の廃止措置に向けての体制に私は若干疑問を持っていまして、アメリカのTMIのときはNRCもDOEも、それから、州政府も、それから、国立の研究機関も一致して非常に大きな問題だということで、NRCもかなり前へ出てやっていました。私は田中委員長がいらっしゃる間に、一歩とは言わ

ないけれども、半歩ぐらい、規制委員会が規制だけをしているということではなくて、0.1歩ぐらい前に踏み出していただくことができないかなと期待しているのですけれども、いかがでしょうか。

○田中委員長　建前だけ、仕組みだけと言ったらいいのかな、経産大臣のもとで汚染水の関係者の集まりがあって、私もメンバーの一人なのですけれども、ここ数年、一回も開かれていませんね。結局、そこに参加するときにも、本来、事業をする、1Fの廃止措置という特別の、国民的、国の課題だから、規制という枠組みを超えて参加しましょうということで参加することにしたのですが、その仕組みは全然動いていないので、なかなか難しいのですね。おっしゃるとおり、スリーマイルのときはアメリカが国を挙げてやったというのもよく存じ上げていますけれども、日本は、NRAまで一緒になってやるという形はまだできていないのですが、別の意味で、1Fの監視・評価検討会とか、廃棄物のこととかで、1Fの廃止については相当のエネルギーというか、協力はしていると。できる立場から、できるだけのことをやっていると。

　ですから、更田委員会などを見ていても、相当積極的な発信はしているのですけれども、それをどう受けとめるかというのは、やはり最後は東京電力とか、そちらに行ってしまうと、そういう状況だと思います。それに、数年前から廃止のロードマップも改定しながら、こういうことを最も優先的にやるべきだということも発信しているのですけれども、具体的なやり方とか、予算の措置までいくと、今度は規制の枠がありますので、そこはなかなか難しいのですね。国民的視点から言ったら、多分、クラサワさんがおっしゃるようなことかもしれませんけれども、それをよく踏まえた上で、我々としてできることはやっていますし、これからももっとやらなければいけないと思っています。

○司会　最後に、ミヤジマさん。

○記者　『FACTA』のミヤジマです。

　経産省主導ですが、東京電力は非連続というような格好のいい言葉で何かやって、その結果として、社長、会長、福島リテラシーほぼゼロと、そういうのを頭に持ってくると。私は本質的にはそこが間違っているのだろうなと、こんなのミスキャストなのだろうなというのが、この間の意見交換の物事の本質だと思っております。先生おっしゃっているように、他の電力会社ではないわけですから、東京電力のトップというのは、頭の半分ぐらいは福島、当たり前だと思うのですけれどもね。率直に言って、宿題持ってこいというよりも、頭の東京電力が福島リテラシーをちゃんと尊重した体制を持ってこないと、話聞いてもしようがないと思うのですけれどもね。小早川さんが経営と福島の問題をジャッジすると言うけれども、一体何をジャッジするのか、私にはよくわからないのです。はっきりその辺を、もうちょっと東京電力は真面目にやれとおっしゃらないと、言い争いではなくて、やはりある種のミスキャストだと思うのですね。その辺のお考えを伺いたいのです。

○田中委員長　いや、私から申し上げるような事柄ではないので、私としても相当踏み込んだ物言いをしてきたと思うのですが、今の御意見はミヤジマさんの御意見として伺っておきたいと思います。私が今ここで何か答えるべき問題ではないなという気がしています。

○司会　それでは、本日の会見は以上にしたいと思います。皆様、お疲れさまでした。

－了－